

Courrier de Séverac

セヴラック通信



第8号

2010
前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

2010年6月19日(土)
衍芸館

《例会》

15:00-16:40

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その3

森 朱美 (S) ・ 鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第1幕第2場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 1, Scène 2, Poème de M. Magare

～休憩～

【演奏】

久保春代 (Pf)

セヴラック：《セルダーニャ》より

Déodat de Séverac : CERDAÑA

村のヴァイオリン弾きと落穂拾いの女たち

Ménétriers et Glaneuses

リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち

Les Muletiers devant le Christ de Livia

館野 泉 (Pf)

末吉保雄 《土の歌・風の声》

Yasuo Sueyoshi : Song of the Earth / Voice of the Wind

《懇親会》

17:00～

セヴラック通信
Courrier de Séverac

第8号
2010
前期

目次

歌劇《風車の心》について(2) ●末吉保雄	4
ジャン=ジャック・クバイネ インタビュー	7
寄稿 石田一郎先生の思い出 ●房田聡子(文)	10
〈連載〉セヴラックと私 ●植村泰一	12
第13回例会の報告 ●鎌田和夫	14
NEWS 《風車の心》CD 発売	17
第13回例会プログラム	表2
編集後記	18

オペラ 歌劇《風車の心》について (2)

第13回例会のお話より

末吉保雄

歌劇《風車の心》は今日からちょうど100年前の12月8日にパリのオペラ・コミック座で初演され14回の公演が行われました。1902年頃からパリで作曲活動をしていたセヴラックにとってこのオペラは、いわばパリ時代の集大成です。

これまでの例会で、歌曲をご紹介してきましたが、それらのメロディのちょっとしたイントネーションなどを、このオペラの中にも聴くことができます。たとえば、今日これから演奏する部分にも、ボードレールの詩による歌曲《梟》とほとんど同じモチーフが出てきます。このオペラではフクロウが大事な役割をしますが、《梟》はこの歌劇の題名が《風車の心》に落ち着く前の、一時の仮題でもありました。

◆故郷への帰還

最初の題は「帰還 Le Retour」で、モーリス・マグル Maurice Magre の書いたテキストに心惹かれて、一幕ものカンタータのような劇場作品を書きました。

日本にも、遠くに行っていた人がだいたい経ってから故郷に帰ってみると知っている人が誰もいなくなっていた、という昔話があります。妻と別れてずっと遠くに行く、帰ってみたら妻は貞淑を守って自分を待っていてくれた、というのはフォーレが作曲した歌劇《ペネロプ Pénélope》で、これはオデッセウスのお話です。セヴラックのオペラはその反対で、帰ってきたら恋人はほかの男と結婚していた、そこで自分は身をひくことにして村をまた出て行く、という話です。

じつはこれとそっくりなお話があります。アルフレッド・テニスの『イノック・アーデン Enoch Arden』という小説で、難破した水夫が孤島で長く暮らして、ようやく故郷に帰ってみたら奥さんは別の男と結婚していた、という話です。2008年に『デオダ・ド・セヴラック Déodat de Séverac : Musical Identity in Fin de Siècle France』という英文の伝記が、イギリスの有名な Ashgate という出版社から出版されました。アメリカの大学の先生が執筆者だと思いますが、現在一番新しいセヴラック研究の集大成です。この本によれば、『イノック・アーデン』と同じ話は、セヴラックのオペラが偶然そうだということではなく、この時代の何人かの作家たちが追いかけたテーマのひとつだったそうです。産業革命や植民地政策が進んで、大勢の男性が遠く離れたところに働きに行くようになります。恋人あるいは妻との別離、長い間の不在のあとの帰還。そういうものが引き起こすさまざまな感情……。帰ってくる人の望郷の念、国に帰りたい、国に帰ったら……。

まさにオペラは、主人公ジャックが故郷に久しぶりに帰ってきて、山、畑、教会、すべてが懐かしさにあふれ、長年夢見ていた自分の郷里に会う場面から始まります。

◆舞台の風景

2007年にサン＝フェリックス・ロラゲに行ったときに、村長さんが大変見晴らしのよい丘の上でシャンパンのレセプションをしてくださいました。その場所がこの写真1です。セヴラック家の少し下にある教会が遠くに写っています。また写真2には広々とした畑の写真が写っています。これはこの小高い丘から畑を見下ろした風景です。このオペラの舞台はまさにここです。実際にはそこに風車はなく、風車はセヴラックがイメージしたものです。オペラの幕が上がると、景色はまさにあの丘の上のような場所です。

ピアノスコアにある挿絵には、向かって右のほうに南仏特有の格好をした風車があります。台本によれば、遠くに銀色に光っているピレネーの山々が見えるのですが、われわれが行ったときには残念ながら曇っていて見えませんでした。オペラの中ではこの近くはずっとブドウ畑で、9月の終わり、ブドウの取り入れの時期を迎えています。ブドウの収穫祭のために村はざわめき、にぎやかにお祭りの準備をしています。ブドウの収穫のために村人たちが大勢集まって働いています。

スコアには2幕の最初に〈ブドウ棚の踊り〉というのがあり、たいそうにぎやかに演奏されます。前述の伝記によると、初演の際は、指揮者がヒロインのマリー役に自分の奥さんを起用して歌わせることになっていました。マリー役のその女性は、2幕の最初に〈ブドウ棚の踊り〉を演奏されると、にぎやかな音楽に地味な自分がくわれてしまうから嫌だ、と言ったそうです。ヒロインをやるような歌手がわがままを言うのというのは昔からよくある話ですが、そのような理由から〈ブドウ棚の踊り〉は初演では最後に演奏されたそうです。

また、このオペラの支配人でプロデューサーで、全体をディレクションしたアルベール・カレ Albert Carré の要請で、本来書かなかったはずのものもダンスとして付け加えたりした、ということがありました。少しずつ例会で明らかにしていきたいと思います。

初演のキャスト一覧をみると、歌手ばかりでなく、ダンスの振り付け師や初演に関わったスタッフ、キャストの名前が出ております。ただフクロウはソプラノで「X」と書いてありますので、名前がわからなかったのかもしれませんが。



写真1 サン＝フェリックス・ロラゲの見晴台



写真2 サン＝フェリックス・ロラゲの見晴台からの眺望

“ LES SOUVENIRS D'ENFANCE ”		
La Fée du Blé	<i>Soprano</i>	M^{lle} A. GANTERI
La Fée des Rondes	<i>Mezzo-Soprano</i>	ROBUR
Le Vieux Mendiant	<i>Ténor</i>	MM. DONVAL
Le Bonhomme Noël	<i>Basse</i>	PAYAN
Vendangeurs, danseurs, ménétriers, enfants.		

表1

◆声の立体性

ピアノスコアには、セヴラックの書いた場面の割り方が載っています。もともと一幕だったものを二幕に伸ばして、いろいろな出入りを考えたわけですが、特徴があるのは、配役表にある“LES SOUVENIRS D'ENFANCE”「子供のときの思い出」（表1）で、これはバックステージから声が聞こえてきて、語りが二重になるような立体的な仕掛けです。主人公ジャックが、自分が子供のときに見たそのあたりの情景や、楽しかったシーンを歌でつづっていくときに、それを4人の歌手で歌います。それぞれ、麦の精、踊りの精、年取った物乞い、サンタクロースといった役割で、ステージには出てこないで、子供のときのジャックが楽しかった昔を思い出すときに歌います。前回もお話したように、このオペラでは、井戸の中から昔の音が聞こえてきます。井戸といっても昔鉱山があったときに掘っていた穴の跡に過ぎませんが、舞台のまんなかから下手寄りにあるその穴から風が吹き上げてきて、いろいろな音を伝え、その音が昔のことを語っているように聞こえる、という仕掛けになっています。中世の宗教劇にあった、声の一種の立体性を復活させようという考えがセヴラックにあったようで、それはオペラを書くときの重要な発想だったと思います。

(談)

ジャン=ジャック・クバイネ Jean-Jacques Cubaynes

インタビュー

2008年、セヴラック協会は設立5周年を向かえ、記念コンサートを行いました。その際に、セヴラックの歌曲の素晴らしい演奏を披露して下さったジャン=ジャック・クバイネさんのインタビューが音楽之友社で行われ、「音楽の友」2009年5月号に掲載されました。ここでその内容について、もう少し詳しくお伝えいたします。

聞き手：岸 純信（オペラ研究家）

Q. セヴラックの存在をどのようにして知りましたか？

セヴラックは1872年生まれ、1921年に48歳で亡くなった、ラヴェルとほぼ同時代の作曲家です。トゥールーズから50キロほどのところにあるサンフェリクス=ロラゲ出身で、そこは人口1200人、とても小さく美しい町でむしろ村と言った方が良いかもしれませんね。そこに歌いに行った時、セヴラックのお孫さんを知り、彼の歌曲を歌ったのが初めての出会いでした。その時には、《梟 Les Hiboux》などを歌いました。

Q. 《梟》は、低音域のGまで使う点がとても印象的です。歌曲では大変珍しいのではないのでしょうか？

これはもともとバスのための曲で、友人で当時有名であったバスのポール・パイヤン(Paul Payan)のために書かれたものです。セヴラックはパリで勉強していた頃に彼と知り合い、自分のオペラ《風車の心》にも出演してもらいました。彼のためにこの曲のオリジナルをバスで書きました。

Q. フランソワ・ル・ルーの録音がありますが、違う調で歌っていますよね？

しばらく聴きなおしていないので、確信はないのですが、たぶんそうでしょう。フランス歌曲はオペラでなくサロンで歌われていたので、普通はバリトンのような中声用が多く、高すぎたり低すぎたりする音は使わないものです。ですから最初の版も違う調性(g)で出版されました。15年ほど前に出版されたサラベール社の楽譜ではオリジナルの調になっています。

Q. 《小さな馬の唄 Chanson pour le petit Cheval》について教えてください。

この曲はもともと、友人でオック地方出身の詩人プロスペール・エステューによってオック語で書かれました。その版もあります。セヴラックは彼と相談しながらフランス語に翻訳したので、オック語の韻律を生かし、オック語の色彩を色濃く帯びたものになっています。この曲と、《朝の歌 Aubade》《降誕祭の歌 Chant de Noel》の3曲合わせて《オクシタン

の花 *Flors d'occitania*》というオック語で書かれた小歌曲集でした。

Q. オック地方の言葉や文化はセヴラックの芸術に直接結びついているのでしょうか？

強く結びついています。セヴラックはオック地方の文化が高貴なものであると認められることを望んでいました。彼の時代にはオック語を、主に農民層が使っていたので、農民の言葉とされていました。でもその8世紀前には身分の高い人たちが使う知性豊かな言葉だったのです。トルバドゥールも使っていましたね。フランスが国として認めていた言語はフランス語のみでしたが、例えばブルトン語など他の言葉もいくつか存在していました。彼はオック語が、単なる通俗的な言葉ではなくて、フランス国家の認める言語になることを望んでいました。

Q. セヴラックの歌曲には、《フィリス *Philis*》のように非常にシンプルなものや《小さな馬の唄》のように込み入っているものがあり、それぞれ面白いですね。

おっしゃるとおりです。どれもそれぞれ違って、スタイルが無いのが彼のスタイルと言えるでしょう。《夢 *Un Rêve*》のようにドビュッシーの影響を色濃く受けているものもあれば、ドビュッシーのように内に秘めた感じとは違う《山の夜明け *A l'aube dans la montagne*》や《終わりなき夜の唄 *Chanson de la nuit durable*》のように叙情的で、広がりがある曲もあり、こちらの方がよりセヴラック的といえるでしょう。彼の音楽は南の地方に根ざっていて、地中海地方の豊かな感情表現があります。彼によれば、地中海と北欧とイルド・フランスとでは、同じ音楽を奏でることは出来ません。11年間パリにいて、コンセルヴァトワールのクラシックかつ厳格な音楽教育を嫌い、スコラ・カントルムに移籍して、より自由な発想で音楽と関っていました。彼には自分の生まれた土地を音楽の中で表現したいという思いが常にありました。

Q. 私はオペラの研究をしまして、フランスのオペラのスコアは400演目ほど持っています。たまたま《風車の心 *Le Coeur du Moulin*》を所蔵していたので、今回テキストを詳しく読んでみました。「coeur」の意味するところについて詳しく教えてくださいませんか？

サン＝フェリクスは風がよく吹くのでたくさんの風車があり、風車はこの地方を思い起こさせるものです。「*Le Coeur du Moulin*」とは、風車に象徴させたこの地方の魂、この地方の心ということなのです。このオペラには、現実に生きている人々と、風車や井戸の声といった大地に永遠に根付いている精霊たち、つまり、大地のいろいろなものを象徴する実質の無い存在が、交錯して現れてきます。小麦の精が出てきますが、小麦は大変重要です。この地のエスプリ、守り神ともいうべき存在で、小麦の精は小麦がうまく育って、この地方の万事がうまく運ぶようにしているのです。日本にも似たようなものがあるのでしょうか？

Q. 来年（2009年）初演100年ですが、上演されますか？

やりたいですね！ 日本ではやらないのですか？ オーケストラは《ペレアス》とだい

たい同じ編成で 80 人位必要ですが、4 手か 2 台ピアノかピアノ伴奏版もありますね。

Q. 録音はありますか？

あまり良くないが音源はあります。ラジオ・フランスで 1965 年に放送されました。

Q. クバイネさん自身は歌われたことがありますか？

ピアノ伴奏ですが、サン=フェリックスで老ムニエ役を歌いました。第 1 幕の最後で歌われるとても美しい曲です。《ペレアス》のアルケルとちょっと似た役どころです。

* * *

この後、インタビューは 1950 年代までのオペラと現在のオペラの歌手たちのスタイルのことや、ご自身の演出のことなどを少し語られています、セヴラックとはあまり関係ないので、割愛します。

また、彼はトゥールーズでフランス歌曲の講習会とコンクールを毎年交互に開催していて、そこでセヴラックの歌曲の指導も行っているとのこと、(ちなみに 2007 年のコンクールの優勝者は日本人だったそうです)、日本にもフランス歌曲のスタイルを是非教えに来たい、東京とトゥールーズと相互交流が出来たら良いですね！ ととても意欲的に話していらっしやいました。

通 訳：深尾由美子
翻 訳・文：山根京子
翻訳協力：平島さより

寄稿

石田一郎先生の思い出

房田聡子

私が石田一郎先生からピアノを教えていただいたのは4歳から十数年間のこと、先生が六十代から七十代にかけての頃でした。

先生にお子さんはなく、ポーランド人とのハーフの奥様とお二人でお住まいでした。先生はピーター・オトゥールに雰囲気の似た長身のダンディな方。奥様はお若い頃は雑誌のモデルをされていたようですが、当時はあまり構わない方で、先生とは対照的でした。動物愛護の活動に熱心で、お宅にはいつも犬や猫がいて、奥様から頼まれて保健所行きの犬を我が家で引き取ったこともありました。また奥様の木彫の腕前は玄人はだしで、自宅にちょっとした工房もあり、私の母はしばらく習いに行っていました。

茅ヶ崎のお宅は閑静な住宅街たすにあり、入り口には奥様お手製の郵便受けがあつて、いかにも芸術家のお宅といった佇まい。春になるとお庭の白いライラックが見事でした。レッスン室は小さく、ヤマハの茶色いグランドピアノ、小ぶりの机とソファでいっぱいになるくらいでしたが、本棚には楽譜がきちんと整頓されて収められ、部屋のあちこちにマチスやモジリアニなどの複製画がさりげなく飾ってありました。

当時、先生の教え子たちは本格的に習う人より、「おけいごと」として来る子供が多かったと思います。私もその一人でした。先生ご自身も、音大を目指すのなら他の先生を紹介し、とおっしゃっていたようです。また、ピアノの発表会もいっさいなく、のんびりとした教室だったと思います。

教則本はほとんど全音楽譜出版社の楽譜を用い、『バイエル』から始まり、ソルフエージュの他にチェルニーの練習曲を数冊、『ソナチネアルバム 1』と『2』の次は『ソナタアルバム 1』と『2』(なぜかハイドンはやりませんでした)と進められました。『ブルグミュラー』のような子供が喜びそうな教則本は使わず、よその友達が〈貴婦人の乗馬〉を習っているのをうらやましく思ったものでした。一回のレッスンは30分で、『ハノン』、『チェルニー』(中学生位になると『バッハ インヴェンション』)をさらった後はショパン、メンデルスゾーンの《無言歌集》、シューベルトの《即興曲》、ドビュッシーの《ベルガマスク組曲》などの中から、いくつか選んで教えていただきました。

先生はいつも穏やかで、厳しいことをおっしゃることはなかったと記憶しています。日々の練習もいい加減なぼんやりした子供でしたから、レッスンの内容はすっかり忘れてしまっていて、覚えているのは音楽とは関係ない些細なことばかり。たとえば、ラジオで国会中継を面白がって聴いておられたこと。身長を聞かれるのでお答えすると、腑に落ちな



いご様子で「尺貫法でないといけない」とおっしゃったこと。若い頃親しかった山本周五郎さんについて懐かしそうにお話されたことなど……。

なかでもうれしかったのは、高校入学のお祝いに詩集『月下の一群』をくださったことです。当時の私はその良さを理解できなかったけれど、子供だからとおもねることなく、わからないなりに本物に触れることが大切だ、とおっしゃっていた先生らしい贈り物だったと、今になって思います。

作曲家としての先生については、ご自分のことを声高におっしゃる方でなかったこともあり、私の通っていた小学校の校歌を作曲されたことや、全音楽譜出版社から楽譜が出ていたことを知っている程度でした。館野先生と懇意にされていることも、母からのまた聞きでした。

私がレッスンに通うのをやめて数年の間に奥様も先生もお亡くなりになり、作曲家としての先生を知るすべもなくなり、お元気なうちにいろいろお話を伺えばよかったと悔やまれます。

ですからずいぶん経ってから『北国 ピアノのための』のレコードを見つけ、館野先生が石田先生の良き理解者であったことを知った時は、胸が熱くなりました。詩情豊かで洗練された音楽は、まさに私の知っている先生そのものでした。

そして昨年、たまたまセヴラック協会の存在を知り、石田先生の曲を聞きたい一心で例会に足を踏み入れ、今度はセヴラックの音楽に出会うことになるのです。権威に背を向け、市井しせいの人として生きるセヴラックに、石田先生の生き方が重なって見えました。また、セヴラックの、つましくも郷愁に充ちた、きらめくような音の連なりにも共通するものを感じたのでした。

先生のお好きだった音楽に出会えたことだけでも満足なのに、例会で知り合った会員の多田さんが茅ヶ崎在住であることから、一緒に館野先生を石田先生のお宅のあった場所にお連れするという、素晴らしい副産物までついてきたのでした。

ここまでたどり着くのにはずいぶん長い時間がかかってしまいましたが、石田先生、そして館野先生が、セヴラックの世界に導いてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいです。依然ピアノは上達しないままの落第生の教え子ですが、少し石田先生に近づけたかなと思っています。



セヴラックと私 植村泰一

今日は少し、フルートのお話をしたいと思います。

セヴラックにはフルートの作品は一曲もありません、私はパリで半年を過ごしたとはいえラングドック地方を訪れたこともありません、それが何と例会で6回もセヴラックの曲を吹くハメになってしまったのです。

2006年の春、石川さんから「《休暇の日々》をフルート六重奏に編曲して演奏したい」という話が飛び込んできたのです。

「セヴラック??知らない!」でもクレール・クロワザの歌っている“*Ma Poupée Chérie*”のCDを持っていることを思い出しました。これがたった一本セヴラックとの細い糸でした。

そしてもうひとつ、石川さんの作曲の先生が何と末吉さんだったのです。

「もう40年近く会っていないけれどパリの仲間じゃない! 懐かしいなあ……」話は決まりました。

これからが本題です。例会でずっと吹いてきた私のフルートは、1871年生まれのルイ・ロット (Louis Lot) という楽器なのですが、セヴラックより2歳も年上です。ドビュッシーは1862年生まれ、《牧神の午後》は1894年、《パンの笛 *Syrinx*》は1912年、つまりみんな同世代なのです。

ベーム式フルートはまだ完成したばかり。1847年の特許をルイ・ロットはテオバルト・ベーム (Theobald Böhm) から買い取りました。そして1860年にはパリ音楽院の教授に就任したルイ・ドリユス (Louis Dorus) によって公式のフルートとして採用されたのです。

こうして19世紀の後半から20世紀にかけてフランスからフルートの名人が輩出し、そしてそれに刺激されて名曲の数々が生み出されたのです。

ベーム式フルートは、それまで使われてきたバロック時代のトラヴェルゾから多鍵楽器までのフルートとは、根本的に違ったアイディアを持った楽器でした。歴史的研究の成果を踏まえて演奏様式が大きく変化した20世紀後半、“トラヴェルゾでなければバッハを吹いてはいけない”というような偏見まで生まれてきましたが、



セヴラックの生家にあるピアノ

最近では、いわゆるピリオド楽器として作曲年代に合わせた楽器を使うということも多くなり、バッハはトラヴェルツで、シューベルトは多鍵の木製円錐管で、ドビュッシーはルイ・ロットのような楽器で吹くという演奏家も出てきています。

ところで弦楽器やピアノはどうなのでしょう、最近ではモーツァルト・ピアノというような昔の楽器を使ったり、19世紀半ばのプレイエルピアノを使ったショパンの演奏会が開かれたり、昔の音を見直そうという機運も起こってきているようにも思えます。

「より強く、より速く」という刺激の強い演奏が可能なメカニズムを追求することにも限界があり、そろそろルイ・ロットのように最初は吹き難いと感じても、そのような楽器をじっくり吹き込んで自分の音を作り、音楽そのものを見つめ、表現する努力をしなければならない時代が来ているのではないかと思います。

例会でのフルートアンサンブルは、このような考えと楽器を持った仲間が集まりました。きっと柔らかな温かい響きを楽しんで頂けたのではないかと思います。

そして、機会があるならば19世紀のプレイエルかエラールのようなピアノでセヴラックの作品を聴いてみたい気がしています。きっと彼の音楽の限りない優しさが、もっと良く聴きとれるのではないのでしょうか。

第13回例会の報告

鎌田和夫

師走とは思われないほど仄々と暖かな冬枯れの日曜日の午後。安らかな思いでエナスタジオに向っていたら、白い毛糸に包まれた愛らしい赤ちゃんが乳母車にすっぽり収まり、ご機嫌な顔で微笑んでいるのに出会いました。母親の爽やかな笑顔の美しく、きつと素敵なお出来事があったに違いありません。そんな母子の散歩に幸せをもらいながら豊かな思いに浸ったまま、会場に足を運べばスタジオ内も同様に明るい空気に満ち溢れていました。そうです、いつもと変わることのないセヴラック協会の例会の時が始まろうとしていたのです。

最前列には笑顔の優しいヤンネさんがヴァイオリンを手に、少し紅潮した面持ちで座っていました。石田一郎の「ヴァイオリン・ソナタ第2番」を平原さんのピアノ伴奏により、いよいよ開演です。曲は静かに緩やかに響きわたり、僕にとっては初めて耳にする曲でありながら、ずうっと以前に何処かで聴いたような懐かしい音に安らぎを覚えたものでした。心温まる演奏に、一昔前の日本の団樂の光景が思い浮かんで来たのです。初冬の眩い輝きの中に素朴な人々の暮らしをイメージしたら、詩が生まれました。或る家族の平凡な時の流れをヴァイオリンの音色が教えてくれたから。

冬の日のこと 鎌田和夫

(第一楽章)

小春日和の
温もりの
冬の陽光
やわらかに
窓辺を白く
照らしつつ
お喋りの花
咲き乱れ
眩しき笑顔
ほころびの
光り輝き
紅椿
一輪挿しの
清澄に
凜と佇み
娘らの
頬に光りの
暖かく
放射しながら
穏やかに

(第二楽章)

出窓に影の
物憂げに
隠れる闇を
誘い込み
音も立てずに
沈黙し
優しく覆う
黄昏の
静けさ破り
子供らは
頓着せずに
遊んでた
光り薄れて
夕暮れの
遠く鐘の音
サヨナラの
訪れを知らず
茜色
部屋に広がり
染まる時

(第三楽章)

灯る明かりの
団樂の
鍋を囲んで
微笑みの
集う幸せ
ゆるやかに
闇の迫りし
窓辺には
下弦の月が
のぞき込み
仮面の笑い
淋しげに
口をひん曲げ
道化師の
涙こらえて
嘆くから
子供は月に
懸命に
手を合わせつつ
祈ってた

いっばいの
喜びに
いっばいの
夜空の星よ
いっばいの
哀しみに
あふれる涙
いっばいの
なぜか楽しく
どこか哀しく
冬の日のこと

休憩の後は前回に続き、末吉先生の蘊蓄あふれる話からはじまりました。セヴラックの歌劇《風車の心》の二回目。第一幕第二場のジャックの唄を鎌田さんのテノールと先生の伴奏で。その日はいつになく情感のこもった男の切ない心の叫び声が聴こえて来ました。マリー、と絶唱する哀しく悩ましげな鎌田さんの歌声は誠に圧巻でありました。サン＝フェリックス・ロラゲの架空の風車とダブルように、セヴラックの生家の前の広場に聳えている塔を思い浮かべたものです。その上に立つマグダラの MARIA 像の淋しげな姿が、マリーと重なっていたのです。

続いて館野先生のピアノ独奏でパブロ・エスカンデの《ディヴェルティメント》。おおらかに、陽気に、のどかに、心豊かになる演奏に元気をもらいました。それは濱田先生の亡き奥様へのオマージュではなかったかと思ったものです。久しぶりに濱田先生の穏やかな笑顔を拝見しながら、そう感じたのです。昨年、他界された奥様への悲しみが癒えない中での出席に熱いものを感じたのでした。「いつも家内は例会に出席することを楽しみにしていました」という一言にホッとしました。

きつと、館野先生のアンコールの演出は濱田夫人に奉げる贈物であつたに違いありません。ピアノ連弾による谷川賢作編曲の《小さい秋》は、館野、末吉両先生に平原さん。打ち合わせなしのぶっつけ本番ということでしたが、戸惑いいつも呼応し、遊び心いっぱい幕が開かれたのです。大いに楽しく愉快に耳を澄ませられる音楽の喜びを教えてくれるのでした。セヴラックの自由な精神を謳歌しようという心が広がって望外の幸せでした。茶目っ気のある悪戯を演出された館野先生の心意気に盛大な拍手が贈られました。しかも、それでオシマイではなく、先生のピアノ伴奏でバンドネオンのヴィッレ・ヒルトウラさんがピアソラの曲を披露してくれたのですから。どこかフィンランド風タンゴの透明な響きにウツトリ。限りなくセヴラックから遠くなくなってしまったのではなく、いかに今日の一日を愉快に快適に過ごすかというセヴラックの精神に相応しく、これぞ音楽の楽しみ、豊かな集いを満喫することが出来たのです。館野シェフの柔らかな心から発想された極上の旨い音楽の料理を、ゴチソウサマでした。そして、濱田夫人に献杯！

あつという間に贅沢な時が贅沢に過ぎて行きました。その日は特に心楽しく、ほろ酔いの中で、僕は乳母車に取まって散歩していた赤ちゃんになっていたようです。そんな風に浮かれた上に、我が自作の詩「左手の唄」を朗々と牧野さんが朗読して下さり、平原さんが伴奏までしてくれました。ありがとうございます。聞き取りにくかった方もいたようですので、この欄をお借りして掲載させていただきます。

～左手の文庫に寄せて～

左手の唄

鎌田和夫

(一)

両手からなる
左手の
奏でる力
透明に
心健やか
温かく
両手からなる
左手の
奏でる響き
清澄に
流れる調べ
限りなく
両手からなる
左手の
奏でる命
穏やかに
慈愛の心
やわらかく

両手からなる
左手の
奏でる泉
どこまでも
涸れることなく
とめどなく
両手からなる
左手の
両手からなる
左手の
ああ魂の
心の手

(二)

両手からなる
左手に
精霊の声
喜びの
憩う心を
遊びつつ
両手からなる
左手に
天使の翼
羽ばたきの
熱き願いの
よみがえり
両手からなる
左手に
木霊す光り
輝きの
ときめく胸に
芽生えゆく

両手からなる
左手に
感謝の心
鍵盤に
聖母の瞳
宿ってる
両手からなる
左手に
両手からなる
左手に
おお魂の
心の手

●歌劇《風車の心》のCD発売

前号でお知らせしたように、2009年9月に録音された歌劇《風車の心》のCDが、フランスのティンパニ・レーベルから発売されました。

歌劇《風車の心》

Timpani / 1C 1176

日本版発売元：
東京エムプラス



キャスト：

ジャン=イヴ・オッソンス (指揮)、トゥール・サントル地方交響楽団、トゥール歌劇場合唱団、
ジャン=セバスチャン・ブ (バリトン)、ソフィー・マラン=ドゥゴール (ソプラノ)、
ピエール=イヴ・ブリュヴォ (バリトン)、マリー=テレーズ・ケレル (メゾ・ソプラノ)、
サビーヌ・ルヴォー・ダロンヌ (ソプラノ)、他

ティンパニ・レーベルのホームページに、関係者の談話映像がありますので、その一部を紹介しましょう。

指揮者のジャン=イヴ・オッソンスは、この作品のオーケストレーションを「色彩豊かで田園の雰囲気満ちている」と評価しています。主人公ジャックが自分の気持ちを通しきれず諦めて再び村を去って行くことから、オッソンスは、このオペラを「諦念」の物語ととらえ、「物語は悲劇だが、愛の一つの可能性を描いている」と述べています。

ジャック役バリトン、ジャン=セバスチャン・ブもオーケストレーションの色彩感を評価していました。またドビュッシーの《ペレアス》の影響を指摘しています。

マリー役ソプラノ、ソフィー・マラン=ドゥゴールは、セヴラックのメロディが穏やかでかなりリリックだと述べています。「テキストをよく考えること、強拍よりその前になる拍に重点をおいて旋律を途切れさせないこと」というコメントは、セヴラック演奏のヒントになるかもしれません。

「セヴラックがもっと管弦楽作品を書いてくれたら良かったのに」とティンパニ・レーベルの社長。彼もまたセヴラックのオーケストレーションを絶賛しています。「作品の長さがCD 1枚分でちょうど良い」と述べていますが、オペラのCD制作はお金がかかるのでしょね。

日本での発売は6月末以降になりそうです。

(文：山根京子・亀田正俊／訳：平島さより)

編集後記

- ◆今回の例会から会場が荻窪に変わります。閑静な住宅街のなかにある、落ち着いた空間でプレイエルの素敵なピアノがあります。ここがまた新たな創造の場になってくれることを願っています。
- ◆2008年に来日されたクバイネさんのインタビューは、昨年「音楽の友」に収録されましたが、紙幅の関係で、多くの話が掲載されなかったのを残念に思い、こちらに再掲させて頂きました。許可を下された岸純信様と深尾由美子様に御礼を申し上げます。

セヴラック通信 第8号 2010 前期 日本セヴラック協会 会報

2010年6月19日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン



日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac - Japon